

第3章 「満足度・生活の質に関する調査」のデータを活用した研究の紹介

「満足度・生活の質指標群に関する研究会」では、2019年調査、2020年調査、合わせて約15000人規模のWeb調査(満足度・生活の質に関する調査:以下、本調査)を活用して、人々の満足度・生活の質の向上に資するよう、生活全般の満足度および分野ごとの満足度を多方面から分析している。ここでは、データが入手可能な分野・地域に限定した分析や、現時点においては分析結果の解釈が一様ではない分析など、試行的なものも含めた6つの研究成果を、研究会での議論を踏まえ紹介する。

1. 市町村レベルにおける満足度と客観指標の関係性(健康状態の満足度の例)

住民の満足度と地域の客観指標(=地域の状況を客観的に表す指標)との関係性は、都道府県レベルにおいてよりも市町村レベルにおいて、より鮮明に現れやすいと見込まれる。そこで、本調査において一定の回答者数が得られた市町村(回答者数が10人以上の366市町村:人口10万人以上の市町村が多数を占める)を対象に、健康分野を事例に選定し、相関分析と重回帰分析を行った。なお、客観指標には、平均寿命、基本健診受診率、がん検診受診率、生活習慣病死亡率、人口当たり病床数・医師数、1人当たり医療費を用いた。相関分析では一部を除いて弱い相関から強い相関が確認できた。重回帰分析では、客観指標を入れ替えて複数のケースを分析したところ、6つの客観指標で健康分野の満足度の7割程度を説明できるモデルも得られた。健診受診率(健康管理の状況)、三大疾病での死亡率(生活習慣病の状況)、病床数(地域の医療資源)の3つのみで説明するモデルでも5割以上を説明するモデルが得られた。

2. 地域レベルの経済社会的条件が住民の健康状態の自己評価や生活満足度に与える影響

本研究では、個人レベルの経済社会的条件(収入、学歴、職の有無)と共変量(性別、年齢、配偶者の有無、調査年)をコントロールしながら、市町村レベルの経済社会的条件(失業者率、1人当たりの課税所得など)を説明変数に用いて、個人の健康状態の自己評価や生活満足度の高さを説明するための重回帰分析を行った。また、健康維持・増進の取組、友人等との交流が、地域レベルの経済社会的条件が個人の健康状態の自己評価や生活満足度に与える影響をどのように媒介しているかを検討した。

分析の結果からは、(1)市町村レベルの経済社会的条件は、住民の健康状態の自己評価や、生活満足度を低下させる傾向があることが分かった。しかしながら、この影

響の大きさは、住民の健康状態の自己評価と個人レベルの経済社会的条件との関連性の5分の1から4分の1であり、地域レベルの経済社会的条件が住民の健康状態の自己評価や、生活満足度に与える影響は、一般的に個人レベルの経済社会的条件と比較して非常に限定的であることを示していた。(2)健康行動と友人等との交流の媒介効果については、健康効果についてのみ確認できた。経済社会的条件の低い市町村の住民は、健康的でない行動を身近な場で目にしたり、その影響を受けたりする機会が多いのではないかと考えられる。

3. 人々を取り巻く様々な環境や属性と生活全体の満足度との関係(満足度が特に低い層に焦点を当てて)

多様な視点から生活全体の満足度が0点～2点の層を回答者全体と比べてみた結果、健康状態、困った時に頼りになる人の有無、交流の有無、趣味・生きがいの有無において、0点～2点の層では全体よりも否定的な回答(よくない、ない等)の割合が特に高くなっていた。満足度が特に低い層の特徴として、健康状態がよくない、困った時に頼りになる人がいない、交流がない、趣味・生きがいがない等が浮かび上がった。また、これらの条件が複合的に重なった生活状況も満足度が特に低い層の特徴として浮かび上がった。

また、要因を分析したところ、生活全体の満足度に対して有意に効く全分野で特に満足度が低い傾向があったほか、個人や世帯の基本的な属性においても、満足度の低い属性がそろっている傾向があった。さらに残差もマイナス側に偏っており、要因分析で把握できていない残りの部分でも満足度を低める要因が働いている状況が確認された。

4. 暮らしの将来的な持続可能性の見通しと満足度の関係性(将来不安の視点から)

将来の暮らしへの不安が現在の満足度に影響を及ぼしているのではないかと、との想定に立ち、現在の分野別満足度と将来の見通し(不安の度合い)の関係性について分析した。その結果、現在の満足度と将来の見通しには、中程度の相関から強い相関がみられた。また、満足度と将来見通しとの差を分野別に確認すると、「健康」「自然環境」「身の周りの安全」で他の分野よりも大きな差が見られた。年齢別にみると、25-34歳、35-44歳で、他の年齢層に比べてやや差が大きく開いていた。これらの年齢層では、他の年齢層に比べて、現在の満足度水準の暮らしの持続を難しいととらえる傾向が強いと考えられる。

5. 生活課題・欲求に対処するための資源からみたクラスター

クラスター分析により、資源保有状況別の類似性に基づいて回答者をグルーピングし、生活全体及び分野別の満足度との関係をみたところ、豊富にそろそろ何らかの資源が1つでもある層は、たとえ、分野別満足度で満足度が低い分野があっても、生活全体の満足度は5.5以上となっていた。一方、すべての資源に乏しい層は、分野別満足度が全般的に低く、生活全般の満足度も低い(5以下)ことが判明した。頼れる資源が一つもない状況の解消、すなわち、一つの資源の十分な向上を目指す方向性が重要である可能性が見受けられた。

6. SNS の利用と生活満足度

本研究では、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の利用と生活満足度との関係を、「知覚されたソーシャル・サポート(社会的支援)(perceived social support、以下PSS)」の媒介効果に着目して分析した。

基本的な回帰分析の結果、第一に、若年層(15～29歳)、中年層(30～59歳)、高齢層(60～86歳)のすべての年齢層において、SNS利用が生活満足度と正の関連を持つことが確認された。第二に、構造方程式モデリング分析により、全年齢層においてSNS利用と生活満足度の関連性に、PSSが介在することが明らかになった。また、SNSの友達の数に関わらず、SNS利用と生活満足度との間の正の相関には、PSSの媒介効果が一貫して寄与していた。これらの結果から、SNS利用はPSSへの正の影響を介して生活満足度を高める可能性があることが示唆されている。

I 市町村レベルにおける主観的満足度と客観指標の関連性(健康状態の満足度の例)

1. 実施概要

住民の満足度と地域の客観指標(=地域の状況を客観的に表す指標)との関係性は、都道府県レベルの状況を示す客観指標においてよりも市町村レベルの状況を示す客観指標において、より鮮明に現れやすいと見込まれる。しかし、市町村レベルの分析を行う場合、アンケート回答者数が十分にそろそろ市町村が少なく、また、市町村レベルの客観指標は少数に限られる点で、満足度と客観指標との関係性を把握するには限界がある。このような限界を踏まえながらも、本研究では、市町村レベルの指標が比較的そろそろ健康分野を事例として関係性の分析を試行した。

ここでは、回答者数が10人以上の市町村(366市町村:人口10万人以上の市町村が多数を占める)に絞り込んで、相関分析を行うとともに、重回帰分析を実施し、説明力の高いモデルが得られるか試行した¹⁸。

客観指標として分析に使用したのは、平均寿命、健診・がん検診受診率、死亡率、医療(病床数、医師数、医療費)である。

2. 結果

最も説明力の高い試算ケース4では、決定係数が0.720であった。ケース4より、シンプルなモデル(ケース1・3・5・7共通の結果)でも、健康診査受診率(健康管理の状況)、三大疾病での死亡率(生活習慣病の状況)、人口当たりの病床数(医療資源の状況)で、満足度の5割以上を説明していた。

以上により、市町村レベルでは、客観指標により健康分野の満足度のかなりの部分を説明できることが把握できた。

¹⁸ 10人より回答者が多い市町村にしぼると計算対象となる市町村数が少なくなり、かつ大きな市町村に偏る点で難点が生じる。他方、より回答者数が少ない市町村まで対象に含めると、地域性を反映せず特定の個人の影響が反映されたデータを含む点で難点が生じる。以上により回答者数が10人以上の市町村を対象に重回帰分析を行った。

図表3-1-1 試算結果

※表中の水色のセルは各試算に使用した客観指標を示す。そのうち、符号条件を満たし、かつ、5%水準で有意だったものについては表中で非標準化係数を記載している。

n≥10の自治体 概ね10万人以上の規模の自治体			試算ケース										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9		
※表中の数値は標準化係数β			R ² (調整済)		0.533	0.577	0.533	0.720	0.533	0.577	0.533	0.515	0.419
(符号条件を満たす、かつp<0.05)			回帰 p値		0.001	0.000	0.001	0.000	0.001	0.000	0.001	0.006	0.004
属性項	(統制)	高齢化率				0.966						0.948	
		性比		0.415		0.519			0.415			0.528	0.572
平均寿命	生のパブリックイメージ	男											
		女				0.432							
		男女(0歳性比調整)											
健診・検診	健康管理・健康リスクの意識が現れる行動	健康診査受診率	0.433	0.471	0.433	0.287	0.433	0.471	0.433	0.389	0.511		
		がん検診受診率(延べ)											
		胃がん検診受診率											
		肺がん検診受診率				0.535						0.559	
		大腸がん検診受診率											
死亡率 (10万人 当たり)	生活習慣病の状況	三大疾病	男女(性比調整)	-0.694		-0.694		-0.694		-0.694			
		悪性新生物	男女(性比調整)										
		心疾患	男女(性比調整)										
		脳血管疾患	男女(性比調整)		-0.439		-1.116		-0.439		-1.203		
	生活習慣病死亡率 構成比	死亡率・三大疾病	男女(性比調整)										
		死亡率・悪性新生物	男女(性比調整)										
医療	健康状態の回復の 社会基盤	人口10万対病床数		0.566	0.502	0.566		0.566	0.502	0.566		0.428	
		人口10万対医師数											
		1人当たり医療費											

Ⅱ 地域レベルの経済社会的条件は、住民の健康状態の自己評価や生活満足度をどのように低下させるのか？

本研究は、本調査を活用して、地域レベルの経済社会的条件が、健康状態の自己評価や、生活全般の満足度にどのように影響しているのかを試行的に分析したものである。¹⁹

1. 実施概要

ここでは、本調査全体の約 15000 名のモニターの回答のうち、1市町村でモニター 10 名以上の回答が得られた 366 市町村に居住する 12461 名のモニターの回答を抽出するとともに、当該 366 市町村の客観データを一般統計から入手し、活用した。分析手法としては、個人レベルの経済社会的条件(収入、学歴、職の有無)と共変量(性別、年齢、配偶者の有無、調査年)をコントロールしながら、市町村レベルの経済社会的条件²⁰(失業者率、1人当たりの課税所得など)を説明変数に用いて、個人の健康状態の自己評価や生活満足度の高さを説明するための多変量解析を行った。また、健康維持・増進の取組²¹や友人等との交流²²がどのように媒介効果を持つのかを検討した。

2. 結果

分析の結果からは、(1)市町村レベルの経済社会的条件は、住民の健康状態の自己評価や、生活満足度を低下させる傾向があることが分かった。具体的には、経済社会的条件が中レベルまたは低レベルの市町村に住んでいる人は、経済社会的条件が高い市町村に住んでいる人と比較して、住民の健康状態の自己評価や、生活満足度を悪化させた。しかしながら、この影響の大きさは、住民の健康状態の自己評価と個人レベルの経済社会的条件との関連性の5分の1から4分の1であり、地域レベルの経済社会的条件が住民の健康状態の自己評価や、生活満足度に与える影響は、一般的に個人レベルの経済社会的条件と比較して限定的であることを示していた。

(2)健康行動と友人等との交流の媒介効果については、健康効果については確認できたものの、友人等との交流では確認できなかった。すなわち、友人等との交流は

¹⁹ この論文作成の背景のひとつに、地域レベルの経済社会的条件が死亡率、罹患率、またはその他の特定の健康アウトカムに悪影響を及ぼすことは、多くの研究から知られてきたが、地域レベルの経済社会的条件が健康状態の自己評価や生活満足度にどのような影響を与えるのかという研究は、これまでほとんど行われていないことがあげられる。

²⁰ 失業者率、大卒以上の教育を受けた人の割合、一人当たりの課税所得、持家率、一人当たりの床面積が最低水準以下の世帯の割合、一人親世帯の割合、高齢単身世帯の割合

²¹ 本調査の回答を活用:健康のために以下のことを普段から行っているか。1)バランスのとれた食事、2)運動、3)十分な睡眠、4)喫煙を控える、5)過度の飲酒を控える、6)ストレスの蓄積を避ける、7)定期検診を受ける、8)特に何もしていない、9)その他。健康行動の連続変数は、1~7の中から選択した項目の数と、9の中から選択した項目の数を足し合わせて構成

²² 本調査の回答を活用:友人や他人との交流の頻度。ほぼ毎日、週に3~4回、週に1回、月に2~3回、年に1回、年に1回、交流する人がいない、それぞれ7、7/2、1、2.5/4、1/4、1/4、1/16、1/48、0を割り当てて、交流の連続変数を構築

地域レベルの経済社会的条件の影響をあまり受けていないのに対し、健康維持・増進の取組は地域レベルの経済社会的条件の影響を受けている。すなわち、地域レベルの経済社会的条件が低いことは、健康的な行動をとることを阻害していることが明らかとなった。経済社会的条件の低い市町村の住民は、健康的でない行動を身近な場で目にしたり、その影響を受けたりする機会が多いのではないかと考えられる。

3. 考察

健康行動の媒介効果については、2つの要因に注意する必要がある。第一に、地域レベルの経済社会的条件が低い場合にのみ媒介効果が働くことである。この結果は、近隣住民の健康的ではない行動が個人の行動に影響を与えるほどになるには、地域レベルの経済社会的条件が十分に低くなければならないことを示唆している。第二に、健康行動によって媒介される健康状態の自己評価および生活満足度への比例影響は17.6%から33.1%の範囲であり、健康行動は無視できないとはいえ、地域レベルの経済社会的条件の影響の支配的な媒介要因ではないことを意味している。健康行動と友人等との交流以外にも重要な媒介要因が存在しうると考えるのが妥当である。²³ それでも、本研究の結果は、健康的なライフスタイルを促進するための政策措置が、地域レベルの経済社会的条件の悪影響を緩和するのに役立つ可能性を示唆している。

4. 結論

本研究では、地域レベルの経済社会的条件は個人レベルの経済社会的条件とは独立した形で、個人の一般的な健康状態と主観的な満足度をある程度低下させることが示された。また、健康行動が地域レベルの経済社会的条件を媒介していることも観察された。これらの結果より、地域レベルの経済社会的状況を改善し、健康的なライフスタイルを促進するための政策が必要であるといえよう。

²³ 実際、近隣への意識や建築環境が、地域レベルの経済社会的条件が健康アウトカムに与える影響を媒介していることが研究で示されている。

Table 5. Estimated association of municipality-level deprivation with self-rated satisfaction and life satisfaction: multilevel

Dependent variable		Self-rated health ^b		Life satisfaction ^c	
Municipality-level deprivation		Coef.	SE	Coef.	SE
z-scoring method					
	Moderate	0.05 *	-0.02	0.06 **	-0.02
	High	0.05 *	-0.02	0.05 *	-0.02
PCA ^d method					
First and second compone					
	Moderate	0.04	-0.02	0.09 ***	-0.02
	High	0.05 *	-0.02	0.06 **	-0.02
First component					
	Moderate	0.01	-0.02	0	-0.02
	High	0.06 **	-0.02	0.05 *	-0.02
Second component					
	Moderate	-0.01	-0.03	0.03	-0.03
	High	-0.01	-0.02	0.02	-0.03

N=12,461 (in 366 municipalities)

^a Controlled for individual-level deprivation and covariates (not reported).^b The higher, the poorer. Standardized.^c The higher, the less satisfied. Standardized. ^d Principal component analysis.*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

Table 6. Mediating effects of health behavior and interactions with others on the impact of municipality-level deprivation (derived by the z-scoring method) on self-rated health^a		
	Coef.	SE
Health behavior^b		
Moderate deprivation β_{11}	-0.04	-0.02
High deprivation β_{12}	-0.05 *	-0.02
Interactions with others^b		
Moderate deprivation β_{21}	-0.03	-0.02
High deprivation β_{22}	-0.03	-0.02
Self-rated health^{b,c}		
Moderate deprivation β_{31}	0.04 *	-0.02
High deprivation β_{32}	0.04	-0.02
Health behavior γ_1	-0.21 ***	-0.01
Interactions γ_2	-0.09 ***	-0.01
Mediating effect on the impact of high deprivation on self-rated health		
Health behavior $\beta_{12}\gamma_1$	0.01 *	0
% proportion: $\beta_{12}\gamma_1/(\beta_{32} + \beta_{12}\gamma_1)$	21.1 *	-9.5
<i>N</i> =12,461 (in 366 municipalities)		
^a Controlled for individual-level covariates (not reported).		
^b Standardized.		
^c The higher, the poorer.		
*** <i>p</i> < 0.001, ** <i>p</i> < 0.01, * <i>p</i> < 0.05		

Table 7. Mediating effect of health behavior on the impact of high deprivation at the municipality level^a				
	Self-rated health ^{b,c}		Life satisfaction ^{b,d}	
		(SE)		(SE)
<i>z</i> -scoring method	Effect	0.01 *	0	0.01 *
	% proportion	21.1 *	-9.5	24.8 *
PCA^e method				
	First and second component	Effect	0.01 *	0
	% proportion	20.3 *	-10.1	17.6 *
	First component	Effect	0.02 *	-0.01
	% proportion	25.2 *	-10	33.1 *
<i>N</i> =12,461 (in 366 municipalities)				
^a Controlled for individual-level covariates (not reported).				
^b Standardized.				
^c The higher, the poorer.				
^d The higher, the less satisfied				
^e Principal component analysis				
*** <i>p</i> < 0.001, ** <i>p</i> < 0.01, * <i>p</i> < 0.05				

Ⅲ 人々を取り巻く様々な環境や属性と生活満足度との関係(満足度が特に低い者に焦点を当てて)

1. 生活全体の満足度が低い人がおかれている状況

生活全体の満足度が低い人は、どのような状況(属性、環境等)下に多くいるのだろうか。ここでは、本調査の多様なデータを組み合わせて、回答者の属性を細分化し、生活満足度を0点～2点と回答している人の多い層をあぶり出していく²⁴。これにより、特に生活全体の満足度が低い人々の満足度を上昇させるために何が必要なのか考える一助とする。

(1) 本調査による満足度の低い者の状況(属性・環境等)

図表3-3-1は、満足度0点～2点と回答した回答者が各性・年齢別、地域別のグループに何%いるのかを整理したものである。性別、年層別、地域別にみると、全体(9.5%)に比べて0点～2点が多い層として、男性 45-59 歳(14.5%)等がみられるものの、全体との差は数%の範囲内に収まっている。基本属性だけで極端に大きな差が生じることはなく、仮に満足度が低い人が多い層が確認できた場合、その層では、属性要因だけではなく、満足度を押し下げる様々な生活条件が重なっているものと想定される。そこで、以下では、各分野において、社会問題として広く認識されている状況を想定し、それらも可能な限り分析軸の要素に加え、各層において満足度が0点～2点の割合を見ていくこととする。

²⁴ 詳細な属性にグルーピングするに当たって重視したのは、社会問題との対応である。失われた世代、引きこもり、ワーキングプア、シングルマザー、あるいは長時間労働、睡眠負債、さらには地方の疲弊等と呼ばれる層や状況は社会的に広く認識されており、特定の状況におかれた層が社会の中で不利益を被っている。そこで、例えば「シングルマザー」の条件と対応するように、アンケートの回答データから属性要素を抽出し、それらを組合せることで分析用のカテゴリを作成し、それらのカテゴリ層の満足度の状況を把握した。

図表 3-3-1

分野	社会問題	分析軸/条件	カテゴリ区分	n	総合主観満足度0-2点の割合
基本属性	ジェンダー	性別	男性	7713	10.5%
			女性	7861	8.6%
	世代間	性別・年層別	男15-24歳	1342	9.8%
			男25-34歳	1378	12.1%
			男35-44歳	1480	11.8%
			男45-59歳	1612	14.5%
			男60歳以上	1901	5.5%
			女15-24歳	1329	6.0%
			女25-34歳	1371	8.7%
			女35-44歳	1471	12.0%
			女45-59歳	1617	10.3%
			女60歳以上	2073	6.4%
地域	地域間	ブロック別(8区分)	北海道・東北	2146	11.1%
			関東	3275	9.5%
			北陸・甲信越	1670	9.6%
			東海	1488	9.6%
			近畿	2167	9.4%
			中国	1416	10.0%
			四国	1055	10.0%
			九州・沖縄	2357	7.6%
		人口規模別	人口100万人以上・特別区	2470	9.3%
			50-100万人未満	1467	9.3%
			20-50万人未満	4240	9.6%
			10-20万人未満	2680	9.7%
			5-10万人未満	2315	9.9%
			5万人未満	2402	9.2%

※回答者全体では生活全体の満足度を0点から2点と回答した人の割合は9.5%となっている。

次に、家族構成、家計、雇用状況、健康状態、教育水準、社会とのつながりなど、詳細にみていくことにする。

(2) 家族構成・家計

家族構成別に満足度を0点～2点と回答した者の割合をみると、単身者でこの割合がやや高くなっている。また、配偶者の有無、性別等で分類すると、男性 45～59 歳、35～44 歳でかつ配偶者がいない者で、満足度が0点～2点の割合が非常に高く、2割を超えている。世帯年収、世帯金融資産残高別にみると、年収、資産とも 100 万円未満の者で満足度が0点～2点の割合が高くなっている。

図表 3-3-2

分野	社会問題	分析軸/条件	カテゴリー区分	n	総合主観満足度0-2点の割合			
世帯	家族形成 (配偶関係・ 単身世帯)	家族構成別	単身	2521	13.3%			
			夫婦のみ	3421	5.7%			
			二世帯	7879	9.7%			
			三世帯	1218	10.6%			
			その他	535	11.6%			
	生涯未婚・ 中高年・高 齢単身世帯	配偶者有無別・ 性別・年層別	配偶者がいる	8969	6.4%			
			配偶者がいない	6605	13.8%			
			配偶者がいない(男15-24歳)	1241	9.9%			
			配偶者がいない(男25-34歳)	680	18.1%			
			配偶者がいない(男35-44歳)	540	20.7%			
			配偶者がいない(男45-59歳)	522	25.9%			
			配偶者がいない(男60歳代以上)	323	12.4%			
			配偶者がいない(女15-24歳)	1086	6.5%			
			配偶者がいない(女25-34歳)	510	16.1%			
			配偶者がいない(女35-44歳)	523	18.7%			
			配偶者がいない(女45-59歳)	565	13.8%			
			配偶者がいない(女60歳代以上)	615	7.6%			
			家計と 資産	経済(収入)	世帯年収別	100万円未満	1064	18.9%
						100万円以上300万円未満	2782	14.5%
300万円以上500万円未満	4225	9.7%						
500万円以上700万円未満	3310	7.4%						
700万円以上1,000万円未満	2616	5.7%						
1,000万円以上2,000万円未満	1331	4.8%						
2,000万円以上3,000万円未満	135	3.0%						
3,000万円以上5,000万円未満	49	6.1%						
5,000万円以上1億円未満	18	5.6%						
1億円以上	44	11.4%						
(再掲)2000万円以上	111	8.1%						
経済(資産)	世帯金融資産 残高別	100万円未満				3860	16.4%	
		100万円以上300万円未満				2723	9.9%	
		300万円以上500万円未満				2195	8.3%	
		500万円以上700万円未満		1488	7.1%			
		700万円以上1,000万円未満		1413	6.7%			
		1,000万円以上2,000万円未満		1649	5.8%			
		2,000万円以上5,000万円未満		1459	4.7%			
		5,000万円以上1億円未満		536	3.7%			
		1億円以上3億円未満		193	5.7%			
		3億円以上		58	6.9%			
		(再掲)1億円以上		251	6.0%			

(3) 雇用、ワークライフバランス

雇用形態別に満足度を0点～2点と回答した者の割合をみると、求職者で25.1%と非常に高くなっている。また、非正規雇用のうちでも男性15～59歳の不本意非正規雇用では24.5%と非常に高くなっている。

ワークライフバランスの視点でみると、仕事時間が14時間以上の層(回答数が少ない)、睡眠時間が1日5時間未満の層で満足度が0点～2点の回答者が多かった。

図表3-3-3

分野	社会問題	分析軸/条件	カテゴリー区分	n	総合主観満足度0-2点の割合
雇用環境 と賃金	失業・非正規雇用	就業状況別	正規雇用	6092	8.4%
			非正規雇用(パート、アルバイト、契約・派遣社員、有期労働者など)	3137	11.8%
			会社などの役員	303	9.2%
			自営業(手伝いを含む)	1124	11.2%
			内職・在宅ワーク	301	11.0%
			学生であり、アルバイトをしている	836	4.5%
			学生であり、アルバイトはしていない	424	7.5%
			学生ではなく、就業していない(求職中)	486	25.1%
	学生ではなく、就業していない(求職していない)	2871	7.8%		
	非正規雇用 (望まない 非正規/就 職氷河期世 代)	非正規雇用(属 性別)	非正規雇用(男性15-59歳:望まない非正規みなし)【2019調査】	306	24.5%
			非正規雇用(望まない非正規)【2020調査】	266	18.4%
			非正規雇用(15-34歳:若年非正規)	810	12.6%
			非正規雇用(35-44歳:就職氷河期)	664	16.0%
			非正規雇用(45-59歳:中高年)	782	13.0%
非正規雇用(60歳以上:高齢者)			881	6.9%	
仕事と生活 (ワーク ライフ バランス)	長時間労働	仕事時間別 【2020】	仕事時間:1日8時間未満【2020調査】	267	8.6%
			仕事時間:1日8-10時間未満【2020調査】	1249	6.5%
			仕事時間:1日10-12時間未満【2020調査】	406	11.6%
			仕事時間:1日12-14時間未満【2020調査】	161	9.9%
			仕事時間:1日14時間以上【2020調査】	57	19.3%
			(再掲)仕事時間:1日12時間以上【2020調査】	218	12.4%
	睡眠負債	睡眠時間別 【2020】	睡眠時間:1日8時間以上【2020調査】	769	8.3%
			睡眠時間:1日7-8時間未満【2020調査】	1526	6.9%
			睡眠時間:1日6-7時間未満【2020調査】	1804	8.9%
			睡眠時間:1日5-6時間未満【2020調査】	820	11.2%
		睡眠時間:1日5時間未満【2020調査】	362	17.4%	

(4)健康、教育、社会とのつながり

健康状態は満足度に大きな影響を与える。健康状態が「よくない」と回答している者の47%、すなわち約半数が満足度を0点～2点と回答している。

教育水準の視点でみると、最終学歴が中学校卒業の者で満足度を0点～2点を回答する割合が高くなっている。

社会とのつながりも、満足度に大きな影響を与えている。困った時に頼りになる人の有無別にみると、頼りになる人がいないと回答している者の3割が満足度を0点～2点と回答している。また、友人等との交流の有無別にみると、満足度が0点～2点の者の割合は、交流なしで24.4%、その中でも同居家族なしで32.2%、困った時に頼りになる人がいないで37.0%、同居家族も頼りになる人もいないで41.3%となっている。世帯状況も組み合わせた場合、頼りになる人もいなくて交流もないと回答している者のうち、単身世帯の者で41.3%、低所得世帯の者で48.5%等が満足度を0点～2点と回答している。

図表 3-3-4

分野	社会問題	分析軸/条件	カテゴリー区分	n	総合主観満足度0-2点の割合	
健康状態	健康状態	健康状態別	よい	2126	4.0%	
			まあよい	4824	4.4%	
			ふつう	5302	8.3%	
			あまりよくない	2764	17.5%	
			よくない	558	47.0%	
教育水準・ 教育環境	学歴	最終学歴別(既卒者)	中学校卒業	401	19.7%	
			高等学校卒業	4372	12.2%	
			専門学校卒業	1819	9.7%	
			高専、短大卒業	1751	8.3%	
			大学卒業	5341	8.2%	
			大学院修了	630	6.8%	
社会との つながり	困ったときに頼りになる人(社会的支援)の有無別	困ったときに頼りになる人がある	困ったときに頼りになる人がいる	14096	7.4%	
			困ったときに頼りになる人がいない	1478	29.6%	
			頼りになる人がいない(同居家族あり)	1070	28.9%	
			頼りになる人がいない(同居家族なし)	408	31.6%	
	社会とのつながり	交流の有無別	交流あり	交流あり	13791	7.6%
				交流なし	1783	24.4%
				交流なし(同居家族なし)	338	32.2%
				交流なし(困ったときに頼りになる人なし)	659	37.0%
				交流なし(同居家族なし、かつ困ったときに頼りになる人なし)	189	41.3%
				社会的孤立(世帯状況別)	単身世帯で、頼りになる人がなく、交流もなし	単身世帯で、頼りになる人がなく、交流もなし
	一人親世帯(18歳未満がいる一人親世帯)で、頼りになる人がなく、交流もなし	10	30.0%			
	低所得世帯で、頼りになる人がなく、交流もなし	198	48.5%			
	高齢単身世帯(60歳以上の単身)で、頼りになる人がなく、交流もなし	36	41.7%			
退職者(男性60歳以上の無職)で、頼りになる人がなく、交流もなし	24	45.8%				

(5)子育て、介護、生活の楽しさ・面白さ

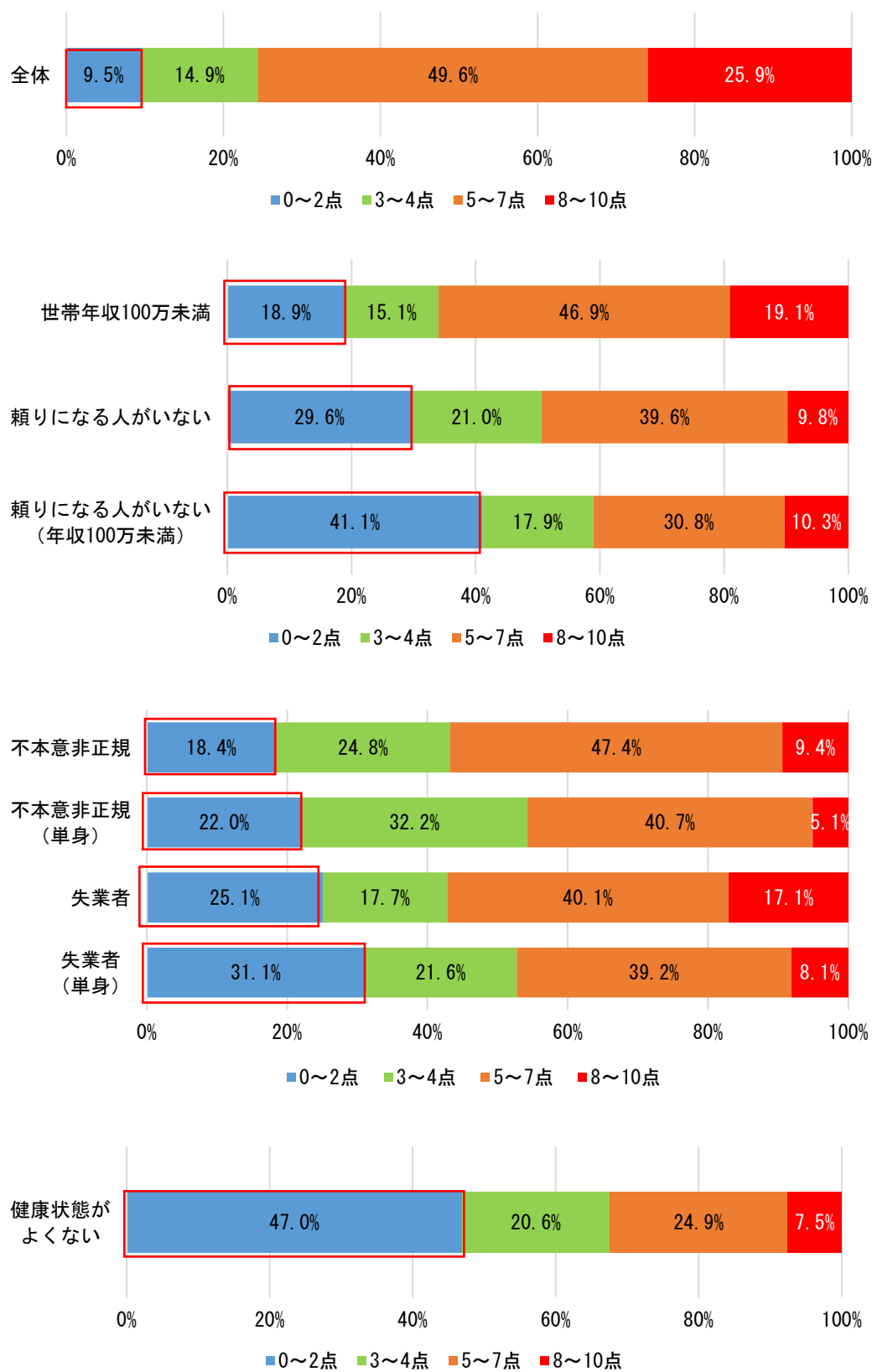
子育て世帯のなかで、満足度が0点～2点の割合が高いのは、18歳未満の子供がいるシングルマザーである。そのなかでも非正規雇用者でこの回答の割合(回答者少)が高くなっている。また、介護についてみると、自分が中心となって介護している者の15.9%が満足度を0点～2点と回答している。

生活の楽しさ・面白さについてみると、趣味・生きがいがない者の21.6%が満足度を0点～2点と回答している。特に趣味・生きがいがないうえ、友人等との交流がない者では33.3%が、その中でも単身の高齢者では46.2%(回答者少)が、満足度を0点～2点と回答している。満足度を押し下げる要因が複合的に重なっている層で、満足度が低い者の割合が高いことが分かる。

図表3-3-5

分野	社会問題	分析軸/条件	カテゴリー区分	n	総合主観満足度0-2点の割合
子育ての しやすさ・ やすさ	女性の育児 負担	18歳未満が いる(性別)	男(18歳未満がいる)	2019	6.7%
			女(18歳未満がいる)	2262	7.1%
		未就学児が いる(性別)	男(未就学児がいる)	1057	5.8%
			女(未就学児がいる)	1285	4.8%
		未就学児が いる孤育て(性 別)	子育てをお願いできる人がいない	527	9.3%
			男(未就学児がいて、子育てをお願いできる人がいない)	231	10.0%
			女(未就学児がいて、子育てをお願いできる人がいない)	296	8.8%
		待機児童が いる(性別)	男(待機児童がいる)	274	6.9%
			女(待機児童がいる)	435	4.4%
		母子世帯・ シングルマ ザー	18歳未満が いる	18歳未満がいるシングルマザー	199
18歳未満がいるシングルマザーで非正規雇用	75			16.0%	
未就学児が いる	未就学児がいるシングルマザー		44	4.5%	
		未就学児がいるシングルマザーで非正規雇用	12	8.3%	
介護の しやすさ・ されやすさ	介護負担	要介護者有無 別	要介護者がいる	2787	10.1%
			要介護者がいる(男)	1258	10.7%
			要介護者がいる(女)	1529	9.7%
			施設入所待機者がいる	212	11.8%
			施設入所待機者がいる(男)	105	11.4%
			施設入所待機者がいる(女)	107	12.1%
	介護の複合 課題	全体	自分が中心となって介護している	358	15.9%
		女性の介護負担	自分が中心となって介護している(女)	232	15.9%
		ヤングケアラー	自分が中心となって介護している(18歳未満)	3	0.0%
		老々介護	自分が中心となって介護している(65歳以上)	164	12.8%
		ダブルケア	自分が中心となって介護し、かつ子育ても実施(子育て時間>0)	53	3.8%
		介護離職リスク	自分が中心となって介護し、かつ被雇用者(正規雇用・非正規雇用)	186	15.6%
		介護離職	自分が家族が介護離職した【2020調査】	97	14.4%
生活の 楽しさ・ 面白さ	趣味・生き がい	趣味・生きがい の有無別	趣味・生きがいがある	12088	6.0%
			趣味・生きがいがない	3486	21.6%
			(内)趣味・生きがいがなく、交流もない人	850	33.3%
		高齢者の状況別	(内)趣味・生きがいがなく、交流もない高齢者(60歳以上)	188	27.1%
			(内)趣味・生きがいがなく、交流もない単身の高齢者(60歳以上)	39	46.2%
			(内)趣味・生きがいがない定年退職者(男性60歳以上で無職みなし)	118	18.6%

図表 3-3-6



(6)生活全体の満足度が低い人の属性の分布

(1)～(5)の結果のうち主要な項目を、逆の視点から見て回答者全体と0点～2点の人の属性の分布の違いを確認する。結果は下表のとおりとなっている。

図表3-3-7

性別

	n	男	女
全体	15574	49.5%	50.5%
0-2点	1484	54.6%	45.4%

年齢

	n	15-24歳	25-34歳	35-44歳	45-59歳	60-89歳
全体	15574	17.2%	17.7%	18.9%	20.7%	25.5%
0-2点	1484	14.3%	19.3%	23.6%	26.9%	16.0%

世帯

	n	単身	二人以上
全体	15574	16.2%	83.8%
0-2点	1484	22.6%	77.4%

世帯年収

	n	100万円未満	100万円以上300万円未満	300万円以上500万円未満	500万円以上700万円未満	700万円以上1,000万円未満	1,000万円以上2,000万円未満	2,000万円以上3,000万円未満	3,000万円以上5,000万円未満	5,000万円以上1億円未満	1億円以上	300万円未満(計)
全体	15574	6.8%	17.9%	27.1%	21.3%	16.8%	8.5%	0.9%	0.3%	0.1%	0.3%	24.7%
0-2点	1484	13.5%	27.2%	27.5%	16.6%	10.0%	4.3%	0.3%	0.2%	0.1%	0.3%	40.8%

世帯金融資産

	n	100万円未満	100万円以上300万円未満	300万円以上500万円未満	500万円以上700万円未満	700万円以上1,000万円未満	1,000万円以上2,000万円未満	2,000万円以上5,000万円未満	5,000万円以上1億円未満	1億円以上3億円未満	3億円以上	300万円未満(計)
全体	15574	24.8%	17.5%	14.1%	9.6%	9.1%	10.6%	9.4%	3.4%	1.2%	0.4%	42.3%
0-2点	1484	42.6%	18.1%	12.3%	7.1%	6.4%	6.5%	4.6%	1.3%	0.7%	0.3%	60.7%

職業

	n	正規雇用	非正規雇用	会社などの役員	自営業	内職・在宅ワーク	学生であり、アルバイトをしている	学生であり、アルバイトはしていない	学生ではなく、就業していない(求職中)	学生ではなく、就業していない(求職していない)
全体	15574	39.1%	20.1%	1.9%	7.2%	1.9%	5.4%	2.7%	3.1%	18.4%
0-2点	1484	34.4%	25.0%	1.9%	8.5%	2.2%	2.6%	2.2%	8.2%	15.1%

健康状態

	n	よい	まあよい	ふつう	あまりよくない	よくない	あまりよくない+よくない(計)
全体	15574	13.7%	31.0%	34.0%	17.7%	3.6%	21.3%
0-2点	1484	5.8%	14.4%	29.6%	32.5%	17.7%	50.2%

学歴

	n	中学校卒業	高等学校卒業	専門学校卒業	高専、短大卒業	大学卒業	大学院修了	中等教育卒(計)	
既卒者	全体	14314	2.8%	30.5%	12.7%	12.2%	37.3%	4.4%	46.1%
	0-2点	1414	5.6%	37.8%	12.5%	10.3%	30.8%	3.0%	55.9%

困ったときに頼りになる人

	n	いる	いない	
全体	全体	15574	90.5%	9.5%
	0-2点	1484	70.5%	29.5%
単身	全体	2521	83.8%	16.2%
	0-2点	336	61.6%	38.4%

(結果の概要)

生活満足度が0点～2点の回答者を様々な属性で分類した結果、特に回答割合が高かった(40%以上の)グループは、①健康状態がよくない、②困った時に頼りになる人がなく、友人等との交流もない(同居家族なし、単身世帯、貧困世帯)、③趣味・生きがいがなく、友人等との交流もない単身高齢者(回答者少)、であることが浮き彫りとなった。また、満足度を押し下げる要因が複合的に重なっている層で、満足度が低い者の割合が高いことが分かった。

2. 満足度が特に低い要因

前項では、生活全体の満足度が0点～1点の人に焦点をあてて、満足度が特に低い人の実態を追ってきた。ここでは、13分野の分野満足度と基本属性を用いて重回帰分析を行い、生活全体の満足度に対して有意に効いている分野等を把握する。

分析の結果、13分野のうち、次の8分野が有意となった。

- ①家計と資産、②雇用環境と賃金、③住宅、④仕事と生活、⑤健康状態、
- ⑥教育水準・教育環境、⑦社会とのつながり、⑧楽しさ・面白さ

この8分野について、生活全体の満足度が0点～1点の人の満足度と回答者全体の満足度とを比べると、その差は2点～3点台となっていた。他方、有意とならなかった5分野では、その差が2点台を下回っていた。生活全体の満足度が0点～2点の層では、生活全体の満足度に有意に効く分野の満足度が全体と比べて低い傾向が確認できた。また、属性についても同様に、0点～2点の層と回答者全体との差をみると、0点～2点の層では、女性、年齢、配偶者、18歳未満の子どものいずれについても回答者全体を下回っていた。これらの属性は、いずれも生活全体の満足度と正の方向の関係性にある。よって、0点～2点の層では属性の側面からみても満足度が低くなりやすい一面を持っていることが確認できた。さらに、この重回帰分析のモデルを使って計算した生活全体の満足度の理論値と、アンケート結果から得られた生活全体の満足度を比べてみると、0点から2点の層では理論値に対して、アンケート結果が低く出ている。残差も低くなったことから、モデルで説明できていない個人的要因等においても、満足度を低める方向に働いていることが把握できた。

図表 3-3-8 重回帰分析の結果

R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の 標準誤差
.796 ^a	0.633	0.633	1.409

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	53392.33	13	4107.102	2068.342	.000 ^b
残差	30897.47	15560	1.986		
合計	84289.80	15573			

	非標準化 係数	標準誤差	標準化 係数	t 値	有意確率
(定数)	0.949	0.104		9.151	0.000
1. 家計と資産	0.208	0.008	0.209	25.903	0.000
2. 雇用環境と賃金	0.039	0.008	0.038	4.697	0.000
3. 住宅	0.056	0.007	0.054	7.653	0.000
4. 仕事と生活	0.124	0.009	0.116	14.062	0.000
5. 健康状態	0.097	0.007	0.092	13.363	0.000
6. 教育水準・教育環境	0.043	0.008	0.038	5.240	0.000
7. 社会とのつながり	0.029	0.008	0.026	3.582	0.000
13. 生活の楽しさ・面白さ	0.368	0.009	0.341	42.714	0.000
女性	0.142	0.023	0.031	6.252	0.000
年齢	-0.031	0.005	-0.217	-6.712	0.000
年齢2乗	0.000	0.000	0.213	6.574	0.000
配偶者	0.403	0.029	0.086	13.995	0.000
18歳未満の子ども	0.111	0.031	0.021	3.594	0.000

図表 3-3-9 満足度等の差

		0-2点の人	回答者全体	回答者全体との差
分野	1. 家計と資産	1.55	4.70	-3.15
	2. 雇用環境と賃金	1.83	4.66	-2.83
	3. 住宅	2.92	5.58	-2.65
	4. 仕事と生活	2.36	5.26	-2.90
	5. 健康状態	2.95	5.56	-2.61
	6. 教育	3.12	5.56	-2.44
	7. 社会とのつながり	2.91	5.39	-2.48
	8. 政治・行政・裁判所	2.43	4.26	-1.83
	9. 自然環境	3.50	5.43	-1.93
	10. 身の周りの安全	3.69	5.67	-1.98
	11. 子育て	3.32	5.20	-1.89
	12. 介護	2.70	4.54	-1.84
	13. 楽しさ・面白さ	2.44	5.66	-3.21
属性	女性 D	0.45	0.50	-0.05
	年齢	42.42	44.05	-1.63
	年齢2乗	2.001	2.210	-208.46
	配偶者 D	0.39	0.58	-0.19
	18歳未満の子ども D	0.20	0.27	-0.08

■: 有意となった分野

図表 3-3-10 残差の集計結果

生活全体の満足度	アンケート集計	理論値	残差
0点	0.00	2.00	-2.00
1点	1.00	2.92	-1.92
2点	2.00	3.46	-1.46
3点	3.00	4.12	-1.12
4点	4.00	4.72	-0.72
5点	5.00	5.24	-0.24
6点	6.00	5.84	0.16
7点	7.00	6.54	0.46
8点	8.00	7.25	0.75
9点	9.00	7.95	1.05
10点	10.00	8.35	1.65
0～2点	1.05	2.80	1.75
全体	5.80	5.80	0.00

(結果の概要)

生活満足度が0点～2点の回答者を様々な属性で分類した結果、特に回答割合が高かった(40%以上の)グループは、①健康状態がよくない、②困った時に頼りになる人がなく、友人等との交流もない(同居家族なし、単身世帯、貧困世帯)、③趣味・生きがいがなく、友人等との交流もない単身高齢者(回答者少)、であることが浮き彫りとなった。また、満足度を押し下げる要因が複合的に重なっている層で、満足度が低い者の割合が高いことが分かった。

また、要因を分析したところ、生活全体の満足度に対して有意に効く全分野で特に満足度が低い傾向があったほか、個人や世帯の基本的な属性においても、満足度の低い属性がそろっている傾向があった。さらに残差もマイナス側に偏っており、要因分析で把握できていない残りの部分でも満足度を低める要因が働いている状況が確認された。